海外取材

バーデン=バーデンはベルリン・フィル一色

ラトル&ベルリン・フィルの復活祭音楽祭

取材・文=中 東生（レポート）
Text=Shinobu Naka
Photo=Monika Rittershaus

ザルツブルクからバーデン=バーデンに移ったベルリン・フィルの復活祭音楽祭が、4月12～21日に開催された。オペラは《マノン・レスコー》（リチャード・エアー演出）。管弦楽演奏会は、ラトル指揮の3プログラムと、メータ指揮のR・シュトラウス・プロの全5公演。その他、室内楽や教育企画など多彩な内容でバーデン=バーデンを埋め尽くした。その中から、ハイライトのプッチーニ《マノン・レスコー》と、復活祭ならではのJ・S・バッハ《ヨハネ受難曲》を演出付きで上演したプロダクションをレポートする。

《マノン・レスコー》から。E=M.ウェストブルック（マノン・レスコー）、M.ジョルダーノ（デ・グリュー）、L.リンチ（レスコー）、他、ベルリン・フィル、S.ラトル（指揮）、R.エアー（演出）（4月12・16・21日、祝祭劇場）

Rattle und Berliner Philharmoniker,
Osterfestspiele 2014 in Baden-Baden

J.S.バッハ《ヨハネ受難曲》から。C.ティリング(S)、M.コジェナー(Ms)、M.パドモア(T/福音史家)、T.レティプー(T)、C.ゲルハーヘル(Br/ペトロ、ピラト)、R.ウィリアムズ(イエス)、ベルリン放送合唱団、ベルリン・フィル、S.ラトル(指揮)、P.セラーズ(演出)(4月13・18日、祝祭劇場)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が、復活祭音楽祭の新たな活動の場所をバーデン=バーデンに移した2年目。「街中をベルリン・フィルの音楽で満たしたい」と、教育プログラムを含むベルリン・フィルの総合的な活動を、この復活祭前後の期間にバーデン=バーデンで凝縮し再現するという意気込みが実感できる。

現代的で洗練された《マノン・レスコー》

4月12日プレミエを迎えた《マノン・レスコー》は、サイモン・ラトルにとって初めてのプッチーニだったというが、精密なテンポ捌きと、それでいて肩肘を張らない軽やかさで現代的に洗練され生まれ変わったようなプッチーニだ。細部まで雄弁なオケは、2幕まで完全に主役になっていた。

デ・グリューのマッシモ・ジョルダーノは、発表当初のキャストではないためか、冒頭では完全にラトルに助けられていた。出だしのフレージング力が弱いことが多いジョルダーノを自由に歌わせるために、ラトルは彼と一緒に歌いながら、何度腕を宙に泳がせたまま待ったことだろう。そこに阿吽の呼吸でついていくベルリン・フィルは、ラトルとの強固な関係を見せつけた。マノン役のエヴァ=マリア・ウェストブルック他の歌手らは、マノンの2曲目のアリアなど難しい部分もあったが、室内楽のように精巧なアンサンブルを実現し、ラトルを信頼し総合的な音楽作りに徹していた。

その流れは、第3幕への「間奏曲」を境に変わった。端正に仕上げてはいるが、ここはやはり南欧の土の匂いが欲しい。全体的な楽想に水平線を思わせるような横の広がりが足らず、上品にまとめ過ぎると、マノンがただの嫌な女になってしまう。デ・グリューの人生をマノンへの愛に賭けさせる、心を焦がすようなノスタルジーがここで表現されていないと、その後のデ・グリューの行動が動機づけられない。そんな欠乏感を、唯一のイタリア人であるジョルダーノが補うように熱く歌い、最後はプッチーニらしく完全燃焼して観客を満足させていた。

《ヨハネ受難曲》セミステージ上演

その正反対の性格を持つもうひとつのハイライト《ヨハネ受難曲》は、宗教的概念を、時代も思想も超えたドラマとして再現したピーター・セラーズによるセミステージ上演だった(4月13日)。

冒頭は合唱のジェスチャーが目障りに感じられることもあったが、古楽器とうまく調和したベルリン・フィルの確かな演奏と、粒揃いの歌手たちによってこの世界に引き込まれていった。福音史家のマーク・パドモアは臨場感を盛り上げ、真っ赤なドレスを来た妊娠8カ月のマグダレーナ・コジェナーがイエスと抱き合う強烈なシーンも人間的ドラマとして仕上げていた。堂々とイエスを演じるデリック・ウィリアムスとビロードに覆われたような心地よい声でドラマティックに歌い上げるクリスティアン・ゲルハーヘル(ペトロ、ピラト)も卓越していた。

その他、室内楽コンサートも質の高い奏者たちが楽しみながら音楽を発信し、聴衆を喜ばせた。

この音楽祭は、これからベルリン・フィルを通してどんどん国際的になっていくことだろう。

INTERVIEW

ラトルが語る復活祭音楽祭2014

今回バーデン=バーデンでは、ピーター・セラーズとJ・S・バッハの《ヨハネ受難曲》を上演しました。《マタイ》に続いて2つ目の受難曲でしたが、セラーズが素晴らしいのは、作品の本質について考えさせてくれることです。彼と仕事をしながら、我々がよく考えたのは、「技術的、音楽的にどう演奏するか」ということではなく、「作品の意味をどう表現するか」ということでした。ベルリン・フィルは、非常に自我の強いオケですが、舞台に上がった時、皆が自分のエゴを捨てて、作品のメッセージを表現することだけに心を砕いたのです。それが、ピーターが我々に与えてくれた真のプレゼントでした。

私が《マノン・レスコー》を初めて観たのは、1983年、ジュゼッペ・シノーポリが英国ロイヤル・オペラにデビューした時でした。それ以来、ずっと素晴らしい作品だと思ってきましたが、指揮者はレッテルを貼られがちです。私がプッチーニを振ることを、人々は期待していないでしょう。しかしそれだからと言って、やらない理由はありません。カラヤンがベルリン・フィルで最後に演奏したオペラは、《トスカ》でした。彼は素晴らしいプッチーニ指揮者でしたし、この作曲家の演奏は、楽団史の一部でもあります。音楽的には、《マノン・レスコー》は管弦楽が緻密に書かれていて、演奏するのが非常に難しい。同時にテンポが流動的で、歌手に合わせるのが難儀なのです。我々にとっては大きなチャレンジでしたが、エキサイティングな「発見の旅」でもありました。

音楽祭記者会見風景。右からセラーズ、ラトル、バーデン=バーデン祝祭劇場インテンダント、A.メリッヒ=ツェープハウザー